

国語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 知り合いを招待して茶会を催す。
- (2) 素晴らしい演奏が喝采を博した。
- (3) 紛糾した事態を解決する。
- (4) 芳香を有する花について調べる。
- (5) 彼の考え方にはケイフクした。
- (6) 商品に売約済みのフダを貼る。
- (7) カンベンな手続きで申請できる。
- (8) 憧れの舞台に立ち脚光をアびる。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

定年退職を迎えた「わたし」は、仕事以外の生きがいや趣味を模索しながら生活し、周囲の人の言葉や本の言葉についてよく考えるようになった。ある日、娘の「千恵」が勤める書店を訪れた。

翌日の昼、わたしはひとりで駄ビルの明森書店^{めいしん}に行った。依子^{よりこ}には言わずに来たが、甘夏をふたつ持ってきたので今ごろばれているかもしれない。

千恵は文庫コーナーで本の乱れをなおしているところだった。声をかけると、「最近よく来るね!」と笑った。

平積みされた文庫の山に、明るいピンク色のPOP^{*}が立っている。葉のイラストが描かれ、『ピンクのプラタナス』という文字が立体的にデザインされていた。

「これも、千恵が作ったのか。」

「うん。彼方^{かなた}みづえ先生のピンブラ。映画公開、発表されたから。」

文庫の帯に、人気女優ふたりの顔写真が載っている。彼女たちが主演するのだろう。千恵はうつとりと言った。

「ホントにいいのよねえ、この小説。何気ない会話にぐつとくるのよ。女性読者だけじゃなくて、お父さんぐらいのおじさんが感動して泣いたって言うてるの。雑誌連載で終わらないでちゃんと本になると、内容は同じでも手に取る読者層が広がるんだよね、素敵なことだね。」

へえ、とわたしは興奮気味な千恵を見る。千恵は言った。

「本買いに来たの?」

「いや……。ちょっと、おまえに聞きたいことがあってな。」

千恵は目をくるつと動かし、小声になった。

「もうちょっとで休憩だから待ってて。お昼ごはん食べようよ。」

昼休憩は、四十五分間だという。エプロンを外した千恵とふたりで、駅ビルのレストランフロアに行った。蕎麦屋に入り、テーブル席で向かい合う。

温かいほうじ茶を一口飲み、千恵はふうと息をついた。

「忙しいのか。」

「今日はそれほど。」

湯呑ゆのみを持つている指の爪が、短く切りそろえられていた。大学のころは、長い爪になにやらいろんな色を塗っていた気がする。千恵は弱く笑った。

「正社員登用の話があったんだけどね、やっぱりだめだった。」

千恵は今年で勤めて五年になるはずだが、契約社員から正社員になるのは難しいと聞いていた。書店業界はなかなか厳しいらしい。

「……そうか。残念だったな。」

「ううん、働けるだけありがたい。」

蕎麦が運ばれてきた。千恵は天ぷら蕎麦、わたしはきつねうどんだ。

「書店、減ってるっていうもんな。今、本って売れないから。」

揚げを汁に浸しながらわたし(1)が言うと、千恵はむっと顔を曇らせた。

「やめて。みんながわかったような口ぶりでそう言うから、そんな流れになっちゃうんだよ。本を必要としている人はいつもいるの。誰かにとって大切な一冊になる本との出会いが、本屋にはあるんだよ。私は絶対、

この世から本屋を絶やさせたりしない。」

千恵はずつと蕎麦をすすった。

正社員になれないとぼやきながら、そんな壮大なことを考えているのか。

心が動くって、そういうことなのかもしれない。本当に好きなんだな、本が。そして、本屋の仕事が。

「……ごめん。千恵、がんばってるのにな。父さんよりずっと立派だ。」

わたし(2)が箸を止めると、千恵はかぶりを振る。

「ひとつの会社で最後までずっと勤め続けたお父さんだって、すごいよ。がんばったよ。呉宮堂くれみやどうのハニードーム、みんな大好きだし。」

「いや、父さんが作った菓子じゃないから。」

*こまち
小町さんともそんな会話をしたなと思いつながら、わたしはまた箸を動かす。千恵はぎゅつと眉をひそめた。

「えー？ それを言うなら、私が書いた本なんて一冊も売ってないよ。」

でも、私(3)がこれがいい！って思った本が売れたら、めちゃくちゃ嬉しい。だからPOPにも気合が入るの。自分が推す本って、気持ち的にはちよつとだけ、私の本ってぐらいに思ってるよ。」

千恵は天ぷらにかぶりつく。

「作る人がいるだけじゃ、だめなのよ。伝えて、手渡す人がいなきゃ。一冊の本が出来上がるところから読者の元に行くまでの間に、いったいどれだけ多くの人が関わってると思う？ 私もその流れの一部なんだって、そこには誇りを持つてる。」

わたしは千恵を見た。こんなふうに、ちゃんと向き合って仕事の話をしてきたことなかった。いつのまにこんなに……大人になって。わたし(4)が作ったんじゃないハニードーム。でもわたしも千恵のように、

素晴らしい菓子だと熱意を持って勧めてきた。誰かが美味しいと顔をほころばせる瞬間にたどりつくまで、その流れの一部になれていたことがたしかにあったかもしれない。そう思うと、わたしの四十二年間も報われる気がした。

「あ、そうだ。そういえばさ。」

蕎麦をあらかた食べ終えたところで、千恵はトートバッグに手をかけた。中から本を取り出す。『げんげと蛙』だ。

「お父さんが草野心平くさのしんぺいを読んでるなんて聞いて嬉しくなって、買っちゃった。」

千恵は本を開き、ばらばらとめくった。

「この『窓』って詩がいいよね。この詩集の中で、ちょっと異質な感じがする。」

親子で同じ詩に心を留めたことが嬉しくて、わたしは訊ねる。

「これ、なんで『窓』ってタイトルなのか、不思議にならなかったか。」

ページに目を落としたまま千恵は、うーん、と唸うなった。

「私の想像だけど。民宿に泊まってさ、窓を開けたら海！ってなって、感動したんじゃない？ それまで部屋の中しか見てなかったのが、外にこんな世界が広がってるって知って。窓辺で潮風に吹かれながら、雄大な海に人生を重ねてたのよ。」

最後のほうはイメージの世界に身をゆだねるようにして、本を開いたまま胸に押しあてる。驚いた。同じ文章なのに、わたしとはまるで違う風景を千恵は見ているのだ。

(3) 千恵といっしょに生きる草野心平は、ずいぶんと明るくてポジティブだ。

詩っていいな。わたしは心から、そう思った。

実際のところは草野心平にしかわからない。でも読んだ人それぞれの解釈があって、それがいい。千恵は本を閉じ、表紙の蛙をそつとなでた。

「私にとっては、自分が読者として本を買うことも流れの一部なんだよね。出版界を回してるのって、本に携わる仕事をしている人だけじゃなくて、なんといつてもいちばんは読者だもん。作る人と売る人と読む人本って全員のものでしょ。社会ってこういうことだなあって思うんだ。」

—— 社会。

千恵の口から出たその言葉に、はっとした。

世界を回しているのは……仕事をしている人だけじゃなくて……。

千恵は本をバッグにしまう。そのとき、バッグにあのカニ*がくついているのが見えた。わたしが思わず「それ」と指さすと、千恵はあけない表情を見せた。

「あつ、これ。可愛いから、裏に安全ピンつけてバッジにしたの。いいでしょ。」

よかった。このカニも、わたしの手元にあるよりもずっと楽しく生きられて本望ほんもちうだろう。

千恵はカニを見ながらほほえむ。

「……小学校のときさ、親子カニ競走ってやったじゃない？」

「カニ競走？」

わたしがきょとんと聞き返すと、千恵は笑った。

「覚えてない？ 三年生のときよ。運動会の親子競技。背中合わせになつて、カニ歩きで競走するやつ。結果はビリだったけど。」

「そ、そうだったな。」

「お父さん、あのとき言ったんだよ。カニ歩きするとおもしろいな、景色しきが横に通り過ぎていくの、いつもより広い世界が見えるなって。横歩

きってワイドビューになるでしょ。」

ほんやりと、そんなこと言ったかなと思う。でもきつと、千恵の記憶が正しいのだろう。⁽⁴⁾ 千恵はちよつと照れ臭そうにうつむいた。

「私、大人になってから、お父さんのあの言葉を時々思い出すんだよね。前はすっかり見てると、視野が狭くなるの。だから、行きづまって悩んだときにふつと、見方を広く変えてみよう、肩の力を抜いてカニ歩きしてみようって思うの。」

そんなふうに、思っていてくれたのか。

わたしは胸がいっぱいになって、泣きたいのを必死でこらえた。

長い間、ずつと気がかりだったんだ。

おまえが大きくなるまで、仕事ばかりで依子に育児を任せきりだった。一緒に過ごす想い出が少なかったかもしれない。わたしは娘に、何も教えてやれなかったかもしれないと。

——人と人が関わるのならそれはすべて社会だと思っんです。接点を持つことよって起こる何かが、過去でも未来でも。

^{*えびかわ}海老川さんの言っていたことがようやく理解できた気がする。

会社だけじゃない。親子の間にもちゃんと「社会」があつたのではないか。幼いころにわたしが何気なく口にした言葉を、大切に解釈して自分のものにしてくれた千恵。成長したその姿に大きく心を揺さぶられるわたし。

千恵のバッグで、動き出さんばかりのカニが私を見ている。

わたしはこれまでずっと、前へ前へと歩いてきた。人生は縦に伸びていくものだと思っていた。

⁽⁵⁾でも今、横歩きの景色には何が見えるだろう。

そばにいてくれる娘が、妻が、日々の生活が、どんなふうに映るだろう。

（青山美智子「お探し物は図書室まで」による）

〔注〕

依子——「わたし」の妻。

POP——おすすめしたい本を紹介する広告。

小町さん——近所の図書室の司書。

カニ——「わたし」が「千恵」にあげたカニのマスコット。

^{えびかわ}海老川さん——「わたし」が住むマンションの管理人。

〔問1〕⁽¹⁾ 千恵はむつと顔を曇らせた。とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 千恵は、現実の厳しさをまのあたりにしつつも書店で本の良さを多くの人に伝えようと努力してきたが、世間で本の価値が低下しているという父親の言葉も認めざるを得ないとしぶしぶ受け入れたから。

イ 千恵は、本が売れないことを残念に思いながらも本や書店の存在理由を自分なりに考えて努力しているのに、書店を絶やさないと決意を父親に壮大な考え方だと受け取られていらだちを覚えたから。

ウ 千恵は、書店での仕事そのものに価値があると考えており正社員になることには全くこだわりのないものの、父親がわかったような口ぶりで書店業界の実態を説いたことに反感を抱いたから。

エ 千恵は、買い手にとって大切な本と出会う場となる書店の仕事にやりがいを感じて努力しているのに、書店や本を取り巻く厳しい現状についてよく知っているかのように父親に言われて不満を感じたから。

〔問2〕⁽²⁾ 千恵はぎゅつと眉をひそめた。とあるが、このときの「千恵」の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 千恵は自分が作った本を売っていなくても仕事への熱意をもっているため、商品作りを否定する父親の考えにひどく動揺している様子。

イ 千恵は本を読者に届けるまでの過程に関わっていることに自負があるため、商品を作ることに重きをおく父親の発言に納得できない様子。

ウ 千恵は自分が本を売る仕事しかしていないことに負い目があるため、商品の作り手を重視する父親の意見も一理あると気づいている様子。

エ 千恵は本を作る人が最も重要だという考えを信じて生きてきたため、父親が商品作りに無関心でいることに対して怒りを感じている様子。

〔問3〕⁽³⁾ 千恵といっしょに生きる草野心平は、ずいぶんと明るくてポジティブだ。とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 千恵は父親の解釈とは異なり、草野心平の詩を窓の外に広がる海と人生を重ねて明るく前向きに解釈しているということ。

イ 千恵は詩の一般的な解釈や印象を自分の書店での仕事を大切にしている生活方に結びつけ、前に進むうとしているということ。

ウ 千恵は父親と詩の解釈について意見を交わしたことで気持ちが明るくなり、解放されたような喜びを感じているということ。

エ 千恵は想像力が豊かであり、草野心平と同様に人生を肯定的に捉えて将来に希望をもって生きているということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ 千恵はちょっと照れ臭そうにうつむいた。とあるが、「千恵」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 千恵は運動会での話を父親が忘れてることに傷つきつつも、広い世界を見る大切さを父親に教えようと決意している様子。

イ 千恵は運動会での父親の話を覚えていて、今も心の支えにしていることを恥じらいつつも父親に伝えようと思っている様子。

ウ 千恵は偶然思い出した運動会での父親の言葉が仕事をする上で役に立つと気づき、父親に感謝の気持ちでいっぱいになっている様子。

エ 千恵は「カニ」を見て運動会での父親との会話を思い出し、自分のこれまでの人生や仕事に役立てればよかったと悔やんでいる様子。

〔問5〕⁽⁵⁾ でも今、横歩きの景色には何が見えるだろう。とあるが、「わたし」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 家族を全くかえりみず会社だけが「社会」だと考えてきた自分の至らなさに千恵との会話で気づかされ、今後家族にできることを模索しようとしている。

イ 千恵との会話で家族との関係や日常の生活に対して無関心であったことが分かり、将来の家族のあり方や家族との過ごし方に不安を抱いている。

ウ 千恵の言葉を聞いて今まで気がつかなかった「社会」のあり方を理解し、日々の生活や家族との関係を新たな視点で見つめ直すようとしている。

エ 仕事で得てきた人間関係や生きがいは一面的なものに過ぎないと千恵に指摘されたが、常に向上し続けようとする今までの人生観から離れられず苦悩している。

〔問6〕 本文の内容や表現を説明したものとしてあてはまらないものは、次のうちではどれか。

ア 「最近よく来るね!」「これも、千恵が作ったのか。」など会話が多くの親子の自然なやりとりが描かれ、それぞれの人物像や関係性が明らかになっている。

イ 「温かいほうじ茶を一口飲み」「千恵は天ぷらにかぶりつく。」など日常の具体的な場面描写が多く、読者が情景を想像しやすいものになっている。

ウ 「いつのまにこんなに……大人になって。」「そんなふうには、思っていないくれたのか。」など「わたし」の娘の成長への驚きや感動が全体を通して描かれ、「わたし」の内面の変化が読みとれる。

エ 「千恵はカニを見ながらほほえむ。」「横歩きってワイドビューになるでしょ。」など比喩表現を多用し、登場人物の感情の起伏や状況の変化を巧みに表現している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

柔よく剛を制す——。よく知られているように、しなやかな柔軟さが一見強そうな堅さを結果的には負かしてしまうものだ、を意味するこの言葉は、人生における他者への向き合い方にとかく当てはめられますが、「柔」が、さらに二つの性質に分けられることは、あまり知られていません。

その二つとは、弾性と塑性。弾性は、「弾力がある」といった表現で割と耳にすることがあるにしても、塑性のほうは、あまり見聞きしたことがないのでは。どちらも柔らかさではあるものの、その実質は正反対と言いたいほど違っているのです。

弾性とは、外部から力が加わって形を変えても、その力がなくなれば元の形に戻ろうとする性質。例えば釣り竿ざおのように。対する塑性のほうは、外部からの力で凹むと、そのままの形を保つ性質なので、加わった力次第でそのつど形状を変化させます。弾性は釣り竿のほかキッチンで洗い物に使われるスポンジとか、近頃なら形状記憶合金など。対する塑性は粘土や金属一般その他です。彫刻における塑像なる言葉も、粘土が自由に形を変えられる素材であることからきています。⁽¹⁾弾性と塑性の、どちらも柔らかさには違いないのですが、外部から力が加わった後のあり方がまるで異なります。では、剛を制すとされてきた柔は、果してどちらか。元に戻る弾性か、凹んだままの塑性か。

人生訓上の「柔」は、これまでほぼ前者の「弾性」をイメージして語られてきたのではないでしょうか。いかなることにも当^{あた}っても自分を見失うな、常に自分の形を忘れず、自分に戻れ、といった具合に。おしなべて「弾性」的な方向での自己実現を目指した教育を受けてきたようにも

思います。

これに対して「塑性」を人生になぞらえてみると、自分の形などどうでもよく、そのつど変化してもかまわないのだ、となり、そんな投げやりな生き方でどうする、もっと自分を大切にしろ！とお叱りを受けかねない。なるほど「自分の形を持つ」ほうが、一見まっとうな生き方のように感じられます。しかし、そもそも自分とは何なのでしょう。自己意識はどこから来て、なぜ自分はここに存在するのか。人生のそんな基本についてまるで分かっていない自分が自分の形をどう決めるものなのでしょうか。自分を分かっていない自分が自分の形をどう決めるものなのでしょうか。私には、若い時分から今に至るまで、自分とは何かを考えれば考えるほど、さっぱり分からない。ところがこの分からないまま自分など考えないのが、自分にとっては良好の状態らしいと、この歳^{とし}になって気づき始めています。何を考えているにしても、すでに考えている自分が存在するのだから、自分なんてまったく気にかける必要はなく、そのつど与えられた環境で適切に対応している自分のままがいいのではないかと。

ところがデザインの仕事では、とかく個性的な表現を求められる傾向があるので、自分らしさとは何かと考えざるを得なくなる。そこで、自分Ⅱ自己Ⅱ自我について考えてみたいと思います。

⁽²⁾ 思えば自我は厄介なものなのです。普段の生活で、習慣としてほとんど無意識に顔を洗ったり歯を磨いたりする時にはひっこんでいる自我が、いざ何らかの目的のために「考える」状態に入ったとたん、俺が俺がと顔を出し始めます。正確には無意識にも自我はあるそうですが、ここでは、自分を強く意識した状態としての自我を捉えてみます。そうし

た意味での自我は、「自分」を意識するスイッチが入った瞬間に目覚めるのです。そして自分が意識されたたん、困ったことに自我は我欲と直結してしまう。

デザイナーがもし、目的も課題もはっきりした仕事においても、自分はこの課題で何をやりたいのか、どうにか自分らしくできないだろうか、まずは「自分」を意識しながら思案を繰り返し返せば、どうしても、自分が好むか好まないかに志向は傾きます。そして、例えば次のような選択をすることになる。A案よりB案が好きで、C案はさらに好きだけれど、それよりD案のほうがもっと好きだから、これにしよう……。『好きなこと』へのこうした志向は、自分中心の自我の強い表れだと言えます。なぜなら、何かを好きと思うかどうかは人それぞれの価値観の問題で、誰もが同じものを好むとは限らないのに、あたかも俺の「好き」にさせる、私の「好き」を理解しろ、と言わんばかりの仕事ぶりだからです。ごく稀に、個人的な趣味をそのまま仕事として成立させている人がないではありませんが、世の中のほとんどの仕事は不特定多数の人々のための営為であって、自分の「好き」のために世の中が回っているわけではないのです。ところが自分の「好き」を基準にしてしか仕事ができない、つまり「我欲」をコントロールできないまま社会人を続けようとしてうまく行かずに悩んでいる人は少なくない。そんな悩める人に向かって「好きなことを自由にやればいいんだよ」などと、世間は無責任な追い打ちまでかけるので、悩みが解決するはずはありません。

ちなみに「好き」を、「素敵」とか「格好いい」に置き替えても、結果は同じです。自分の好き、自分感覚の素敵、自分にとっての格好いいを基準にしてしか仕事ができない、自我を通すのを最優先していることに違いはないのですから。

女性であれ男性であれ、人は自然体でいる時には自分についてなどおよそ意識していないにもかかわらず、自我のスイッチが入ると、たちまち自分を意識化して、感覚的にも理論的にも自己肯定しようとしします。人に自意識がある以上いたしかたないのかもしれませんが、仕事で自我が芽を出したと気づいた時に、できるだけ早くその芽を刈り取るべきです。誰にでも一人前の自我があり、仕事においても気を抜くと自我はたちまち芽を出す。わが身からはえ出た自我の芽に気づかず、刈り取らないでおくと、さらにそれを守ろうとする自分が現れる。怖いことです。こうして自我の根が深く張り、自我のために都合よく周辺から養分を吸収して理屈を組み立て、幹はどんどん太くなり、「自分」という大木にまでなってしまうとこれを自分自身で切り倒すことはなかなかできません。だからこそ、なるだけ早く自我の有毒性を自覚する必要があるのです。

自我が出すぎていかどうか自覚するためには、折あるごとに自分を疑ってみなければなりません。何かよい案を思いついても、その直後に、これは第三者にもちゃんと伝わるのだろうか、と自分を疑ってみる。自画自賛に陥ってはいないだろうか、と。⁽³⁾なぜなら、どんな仕事でも本来、こちらの自我をあちらの他者に押し付ける所行ではなく、多くの人々と共鳴するところを冷静に感じ極める作業だからです。もちろん対象によってその程度は異なるし、自分の想いの丈をぶつけていい場合もあります。

例えば自己資金で限定十個の作品を販売するのなら、自我を抑える必要などないでしょう。自分の想いを存分にぶつけた作品に共鳴してくれる人が、この広い世の中に十人くらいなら存在するはずだからです。たとえまったく売れなくても、その責任は自分でとればいい。あるいはそ

の人の作家性を期待されて仕事の依頼を受けたのなら、思いっきり自分がやりたいだけやればいい。ただし、予算や制作期間の問題などで関係者に迷惑を掛けることは、むろん許されませんが。

では、道路標識のデザインはどうか。この仕事を任されたデザイナーの自我はどのくらい必要でしょうか。公共のサインである道路標識は、言葉も価値観も視力も、文化的背景すらも異なる人たちがほんの一瞬見て判断するグラフィックデザインであり、場合によっては命にかかわるものなので、できる限りの普遍性が求められます。つまり、道路標識をデザインする人の「自我」は、どこからも求められてはいないのです。同様のことは、老若男女誰にでも使用される可能性のある嗜好品などについても言えるし、使用する素材の資源の問題やコスト、使用済みになった後の処理にまで考えを及ぼすとすれば、自分勝手が許される余地などどこにもないではないでしょうか。

このように、対象によってなすべき内容が異なるのだから、与えられた仕事がどんな環境にあるかを客観的に把握しなければ。それでも、無意識にも自我はあるとすでに記したように、自分を意識していなくても自我は出てきてしまうものなので、自分のしていることを客観的に見るのはたやすくありませんが、常に相手や周囲の環境を優先し、それらを客観的に理解する習慣がつくと、厄介な「自我」の呪縛から解放され、楽になり、なすべきことが浮かび上がってくる。それは対象から自ずと表れ出てきたもので、主体は自分ではなく、飽くまで相手なのです。この方法が見えてくると、自我が描こうとする世界とはまったく異なった地平が拓かれます。⁽⁴⁾そして「やるべきこと」が、無理なく「やりたいこと」に変換され、「やりたいこと」と「社会」が連動し始めるのです。

(佐藤卓「塑する思考」(一部改変)による)

〔問1〕⁽¹⁾ 弾性と塑性の、どちらも柔らかさには違いないのですが、外部から力が加わった後のあり方がまるで異なります。とあるが、「弾性」と「塑性」について述べたものとして、最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 弾性は外から加えられた力に応じて形状変化を起こしながらも復元しようとする性質であるのに対して、塑性は外部からの力の有無にかかわらず、自由に形を変ええる性質。

イ 弾性は外部から力が加えられても形を変えず、そのまま形状を保つ性質であるのに対して、塑性は自在に形を変えた後にさらに圧力を加えても形状が変化しない性質。

ウ 弾性は加えられた力によって形状に変化が起こつても元の形状を回復しようとする性質であるのに対して、塑性は加えられた力によって変化した形状を維持する性質。

エ 弾性は外部から加えられた力によって変えられた形状を記憶し、保持する性質であるのに対して、塑性は外部から強く力が加えられたときにだけ形状が変化する性質。

〔問2〕⁽²⁾ 思えば自我は厄介なもののなのです。と筆者が述べたのはなぜか。その説明として次のうちから最も適切なものを選び。

ア 自我は無意識下に我欲と結びつくために自分自身ではコントロールできないものであるが、世間の人々は自我が制御不能であることに配慮することなく相手を厳しく批判してしまうから。

イ 自我は「自分」を意識するとたちまち我欲と結びついて自らを肯定しようとする性質をもち、その性質への自覚がないと自我が強固になって制御できず、社会生活に支障をきたしてしまうから。

ウ 自我は目的や課題のはっきりした仕事においてのみ目覚めて機能するものであるため、明確な目的意識をもつことができる「好き」な仕事をすればするほど自我の有毒性があらわになるから。

エ 自我は感覚的にも理論的にも自己肯定しようとする意識のことであるが、周囲の人の助けによって理屈を組み立てることでますます自我は強固になり、抑制できなくなってしまうから。

〔問3〕⁽³⁾ なぜなら、どんな仕事でも本来、こちらの自我をあちらの他者に押し付ける所行ではなく、多くの人々と共鳴するところを冷静に感じ極める作業だからです。とあるが、なぜ「どんな仕事でも」「自我を」「他者に押し付け」てはいけないのか、という問いに対して次のように答えるものとする。□に入る適切な八字の語句を、本文中より抜き出して書け。

社会における多くの仕事は、好みが多様である□の共感を得る中で営まれるものであるから。

〔問4〕そして「やるべきこと」が、無理なく「やりたいこと」に変換され、⁽⁴⁾

「やりたいこと」と「社会」が連動し始めるのです。とあるが、「やるべきこと」が、無理なく『やりたいこと』に変換され」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 常に周囲の人々に配慮して「やるべきこと」を実行する習慣をつけると、「やりたいこと」をしようとする自我から無理なく逃れられるということ。

イ 社会に広まった価値観や社会で求められる仕事には普遍性があるため、社会人の「やりたいこと」と「やるべきこと」は常に一致しているということ。

ウ 自分中心に物事を進めようとする自我の呪縛から解放されると、常に相手や周囲の環境を理解して行動することを自発的に求めるようになるということ。

エ 相手を主体として仕事というものを考える習慣がつくと、自然と自我に縛られずに相手の求めに応じて仕事をしたいと思えるようになるということ。

〔問5〕本文の展開について説明したものととして適切なものを、次のうちから選べ。

ア 冒頭に引用されている「柔よく剛を制す」という言葉は、社会で広く語られてきた見解と筆者の見解に相違があることを述べるための導入として用いられている。

イ 「自己資金で限定十個の作品を販売する」という例は、好きにデザインすることで周囲の人に迷惑をかけることは許されないという筆者の主張を強調するものとなっている。

ウ 「道路標識のデザイン」の例は、世の中のあらゆるデザインには文化的背景の異なる人でも使用できる普遍性が必要であるという筆者の主張を補強する役割をもっている。

エ 本文全体を通して、優れたデザインとは個性的な表現と万人に認められる有用性をもった表現の双方を兼ね備えたものであると筆者は主張している。

〔問6〕何を考えているにしても、すでに考えている自分が存在するの

だから、自分なんてまったく気にかける必要はなく、そのつど与えられた環境で適切に対応している自分のままがいいのではないかと。とあるが、「そのつど与えられた環境で適切に対応している自分のままがいいのではないか」という意見についてあなたがお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

芭蕉の句を対象に、感情表現の特徴と効果を見ていきたい。

A 見送りのうしろや寂し秋の風

『三つの顔』

この句は「野水が旅行を送りて」と前書きがあり、名古屋に滞在中、上方に赴く野水への餞別吟として詠まれたものである。当地で出合った連衆との別れのつらさを、「寂し」と率直に表現している。

この句にはなぜ「寂し」という感情表現が使われているのだろうか。というのも、「秋風」という季語は、元来寂しさを旨とするものであるから、季語の感情を託して直接的に「寂し」といわない方法もあったはずだからだ。近現代俳句の価値観からすれば「見送りのうしろすがたや秋の風」とでもすれば、より「もの」俳句に近くなる。

しかし、これでは「見送っている私」の寂しさは伝わるが、それだけである。⁽¹⁾感情表現を除いたことで、かえって味気の無い、単純な句になってしまっている。

惜別の句で大切なのは、自分だけが寂しがつっていると表すことではない。相手もまた、自分との別れを寂しがつている。その胸中を思うことで、自分の寂しさもまた深まるのである。つまり、「見送りのうしろや寂し」ということで、見送る背中の寂しさを見届けている自分も寂しくなり、またそうした感情を共有する関係を築けたことの誇らしさやありがたさといった、別の感情もまざりこんでいる。ただ別れが寂しいだけでなく、さまざまな思いの入り混じった「寂し」となっているのであり、そ

れこそがこの句で「寂し」と置かれた理由であった。つまりこの句では、

I が起こっている。のちにこうした詠み方は、

B 行く春や鳥啼き魚の目は泪

『おくのほそ道』

というみちのくへの旅立ちにあたっての吟に受け継がれる。ここでも、「泪」という感情的な語彙は、複雑な意味合いを帯びている。これは嘆き悲しむ「魚」のなみだでもあり、自分を見送りに来てくれた連衆のなみだでもあり、また彼らと別れる自身のなみだでも⁽²⁾ある。それらをひっくるめての悲しみの泪なのかと思いきや、結局のところそれは水の中に棲む魚の目が濡れているというだけのことという、まぜつかえしが最後にやってくる。読む側の感情も揺さぶられる体験を、たった十七音で引き起こしているのである。

ほかにも、^{*}挨拶句においてこうした感情表現の深化が見られる例をあげてみよう。

C 口切に堺の庭ぞなつかしき

『俳諧深川』

D おもしろき秋の朝寝や亭主ぶり

『まつのみ』

一句目は、「^{*}支梁亭口切」という前書きがついている。「堺の庭」とは、^{*}千利休が松島の雄島の景色を取り入れて設えた著名な茶庭。俳諧の席を詠ってくれた支梁に対して、かつての利休の堺の庭も思い起こさせるほどだとして、感謝と挨拶の意をこめている。これも「なつかし」は作者個人の感情というよりも、なつかしいという感情を一座で共有するための「なつかし」であり、眼前の茶席を利休の堺の庭に見せる

ためのマジック・スペルとして働いている。「なつかし」の感情を、その場のみなで分かち合っているからこそ、新春の茶席を表す「口切」という季語のめでたさが生きてくるのである。

二句目は、大阪の町人・車庸しやようの家で歌仙かせんを巻き、夜遅くまで談笑した、その翌朝の感慨を詠んだもの。仲間たちと俳諧遊戯にふけて眠りこけるといふ風狂を「おもしろし」ということで、そうしたのびのびした座を提供してくれた車庸に礼をいつているのだ。これもやはり、ただ自分の感情を述べているわけではなく、「おもしろし」という感情を「亭主」もまた抱いていることを確認しつつ、ともに自堕落な「秋の朝寝」を楽しむという呼びかけとなっている。

感情表現が、作者個人を超えて、その場の他者や、雰囲気まで波及していく。これは、言葉が凝縮して使われる俳句ならではの表現方法である。このような「感情表現の深化」は、挨拶句においてのみ実現されているわけではない。

E おもしろや今年の春も旅の空

『去来文』

『おくのほそ道』の旅に出る前、芭蕉が門弟の去来に向かつて出発をほのめかした句である。上五の「おもしろや」は、旅暮らしの身を、今年の春もまたはじめようとしているという中七下五の述懐とあわせて考えてみれば、その感慨におのずと、自嘲的な悲哀と、その裏返しうら返しの自負の念がこめられていることに気づく。「春も」の「も」を軽く見るべきではない。庵いおりがあるにもかかわらず落ち着かず、なんの καν のと理由を付けて旅ばかりしている人生を楽しむ心もありながら、そんなみずからにうんざりしているような「も」なのである。「旅の空」は、おそら

くシーシユボスの刑罰のように、永遠に続く。

感情について古代中国の経書きんしよ『礼記』は、「喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲」の七つに分類しており、現代において変わることはないが、実のところ、複雑怪奇な人間の内面を「うれし」「たのし」などと一言ですませることなど、できるはずもない。毛皮をはがれた因幡いなばの白うさが泣き、弟スサノオのふるまいにアマテラスが怒るなど、感情表現が豊かであった『古事記』『日本書紀』では、一つの感情にさまざまな漢字を当てて、それぞれ微妙にニュアンスが異なっていた。たとえばよろこびは「喜」「歓」「悦」「欣」など、怒りは「悲」「忿」「瞋」「赫」などといったように。このように一語によって多彩な漢字表現が可能であればともかく、限りある感情表現では細かなニュアンスを表現することはむずかしい。だからこそ、安易な感情表現は慎むべきといえるのだが、俳句においても、一句のほかの言葉との兼ね合いによって、ひとつひとつの感情表現に複雑な意味を持たせることは可能なのだ。

たとえば、『芭蕉七部集評釈』など芭蕉研究に大きな足跡を残した幸田露伴だろはんは、自宅で親戚相手の俳諧研究会を開いていたのだが、その中で、

F 風邪ひきたまふ声のうつくし

越人*えつじん 『あら野』

という、越人の付句を取り上げながら、これを「反対句」「反想」と呼び、こんなふうに鑑賞している。

これはつまり、風邪をひけば声がわるくなるはずなのにそうではないので、ふだんはどんなに美しい声であろうというところを狙ったもの（略）

（高木卓『露伴の俳話』講談社、一九九〇年）

「うつくし」という直接的な感想が述べられているが、本来とは逆の使い方をしているがために、文字通りの「うつくしい声」というだけではなく、「たとえ風邪声であつても減じることのない美しい声」というこまやかなニュアンスを帯びることになる。

芭蕉の句においても、

G 蛇食ふと聞けばおそろし雉きじの声

『花摘』

には、和歌では妻を恋こいて「ほろろ」と優しげに鳴く鳥とされた雉の、野鳥としての側面に鋭く切り込んでいる。雉も実体としては野鳥であり、蛇も食らって生きているのであり、その意味で「優しげでもあるが野に生きるものとしての凶暴さもある」といったような、複雑なニュアンスでの「おそろし」なのである。

⁽³⁾「おもしろや今年の春も旅の空」の句にも、この「反对句」「反想」の方法が生かされているといえよう。毎年毎年繰り返される宿業*しゆくごうとしての「旅」を、「おもしろや」といつているのだから。

このように、芭蕉の句において使われている感情表現は、複雑な意味とニュアンスを帯びている。

(高柳克弘「隠された芭蕉」による)

〔注〕

野水——江戸時代の俳人。

連衆——俳諧の座に集まった人々。

「もの」俳句——視覚的な物象が示されることで読者が言外の余白を読み取ることができる俳句。

挨拶句——句会の場所で、招かれた客が主に対して挨拶として読む句。主が第二句を返す。

支梁——江戸時代の俳人。

千利休——安土桃山時代の茶人。

歌仙を巻き——二人以上の詠み手が句の五七五と七七を交互に詠み連ね、三十六句で区切りをつけることを「歌仙を巻く」という。

庵——僧侶や世捨て人などが住む粗末な小屋。また、小さな家。
シーシュポス——労役を課せられ続けることになったギリシア神話の主人公。

経書——儒教の教えが記された書。

越人——江戸時代の俳人。

付句——前の句に対して付ける句。

宿業——前世で行ったことが、現世に報いとして現れるもの。

〔問1〕⁽¹⁾ 感情表現を除いたことで、かえって味気の無い、単純な句になつてしまつてゐる。とあるが、なぜ「見送りのうしろすがたや秋の風」の句は「味気の無い、単純な句」なのか。その説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 「寂し」という旅先での別れのときに抱く心情は「秋の風」によつて表されるが、見送る人の寂しさまでは表現できないから。

イ 「寂し」という感情は「秋の風」という語から感じることはできず、見送られる人と見送る人の人間関係を推察できないから。

ウ 「秋の風」は見送る側の「寂し」という胸中のみを表し、見送られる側の心情や人間関係までは表現できないから。

エ 「秋の風」という語は饒別の句に用いられるが、「秋の風」がもたらす雰囲気だけでは「寂し」という感情は伝わらないから。

〔問2〕
I に入る適切な七字の語句を、本文中より抜き出して書け。

〔問3〕⁽²⁾ もとあるが、ここで用いられている「も」と同じ意味・用法で使われている例文として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 一週間も練習すればできるようになるだろう。

イ 今日読んだ本は中世も鎌倉のころが舞台である。

ウ 友人が作成した絵は完成までに三か月もかかったそうだ。

エ 待ち望んでいた夏がいつの間にか野にも山にもきていた。

〔問4〕⁽³⁾ 「おもしろや今年の春も旅の空」の句にも、この「反對句」「反想」の方法が生かされているといえよう。とあるが、「反對句」「反想」の方法とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 同じ俳句の中のほかの言葉と関連することにより、感情を表す一つの語が複雑な意味を帯びること。

イ 同じ俳句の中のほかの言葉との複雑な関係により、感情を表す語がもつ二つの意味が一つに規定されること。

ウ 同じ俳句の中のほかの言葉との組み合わせにより、感情を表す語がもつ意味のうちの一つが強調されること。

エ 同じ俳句の中のはかの言葉との対比により、感情を表す語の本来の意味とは無関係の二つの意味が生じること。

〔問5〕 本文の内容や表現を説明したものとして適切なのは、次のうちではどれか。

ア AからGの七つの句が引用されていることによって、句を詠む場面ごとに異なる芭蕉の感情表現の多様さが時代とともに変化していることが明らかになっている。

イ C・Dの句についての記述は、感情を表す語が個人だけでなく周囲の人々のものでもあることや場の雰囲気をも内包するものであることを示している。

ウ 経書『礼記』や『古事記』『日本書紀』についての記述は、漢字と同様に俳句においても一語だけで細やかな感情表現が可能であることを述べるために引用されている。

エ 芭蕉研究を行った幸田露伴の鑑賞を引用することによって、感想を表す語が本来とは逆の意味で用いられるとかえって本来の意味がきわだつことが示されている。

7
|
寺

国

五
日